アトリエ訪問

第 25 回

隈 研吾

建築家

今や街を歩けば、至る所で出会うことができる隈研吾の建築。
木や石などの素材を最大限に生かしたその空間は、
多くの人々に安らぎと感動を与えてきた。現在もおよそ50か国で、
400近くのプロジェクトが進行中。世界中を飛び回る
彼が拠点とする、東京の事務所に伺い、
建築への思いを語ってもらった。

撮影 永野雅子

多くのファッションブランドの店舗や飲食店が立ち並ぶ、東京・青山。華やかな大通りから一本小道に入り、涼やかな竹林を横目に歩を進めると、とある建物から、さまざまな国の人が出入りしているのが見える。この建物こそが、隈研吾建築都市設計事務所だった。



屋上のテラス。見晴らしのよいこの場所で、自由に椅子を並べて、打ち合わせを行う所員の姿も。

――青山という地に事務所を建てたのはなぜですか。

隈　まず自分が好きな街で仕事をしたかった。好きな街には、多分その街の感性と自分が響き合うものがある。そういうところに事務所を置くと、その感性に共感する仲間が集まってくるでしょう。そういった人たちと仕事をすることが大事だと思ったんです。そして、明治神宮外苑の森が近くにあるところもいい。学生の頃ずっとそこのテニスコートでテニスをしていたから、僕にとって外苑の森は遊び場なんです。あとは、いろいろなファッション関係のお店もあって、その界隈の人たちが集まるような飲み屋さんもある。緑もあるし、夜の遊び場もあるのがこの辺のいいところかな。

――仕事で海外に行かれることが多い隈さんにとって、この事務所はどのような場所ですか。

隈　ここは僕のライブラリーでもあります。設計の打ち合わせだけじゃなくて、原稿も書く。そのために必要な本が全部集まっています。僕にとって、設計やデザインをすることと、そのデザインしたものをテキストによって整理するっていう両方の行為が大事だから、自分が読んできた本がここに集まっていて、いつでも参照できるということがすごく大事なんです。



デスクスペースの書棚。
建築や美術関係の書籍などが所狭しと並べられている。

――外国の方が出入りしている様子を何度も見ました。

隈　今や外国人の所員のほうが多くなりました。みんなそれぞれの国の文化を持ち寄ってくるから、日常会話の中でも、ローカルな、生の情報がたくさん手に入るんです。よく事務所の屋上のテラスで、パーティをしたりして、みんな交流を深めていますよ（笑）。室内よりも室外の空間のほうが、人間をリラックスさせてクリエイティブな空間をつくると思っています。だから、事務所を設計するとき、このテラスを思いっきり広くとることにこだわりました。ここで建築に使うサンプルのチェックをしたりもします。石やタイルとかを屋外に並べてみて、太陽の光で見て、この材料がいいなって決めています。

「日本文化の大使みたいな役割を果たしていきたい。」

――光村図書の高等学校教科書『美術 2』(P.46～47）では、中国のホテル「Great（Bamboo）Wall」などを、スケッチとともに掲載させていただきました。

隈　スケッチには僕の気持ちを込めることができる。建物をどういう風にしたいのか、この素材をどのように使いたいのか、みたいなことをスケッチだと伝えることができるから、大事にしています。



Great（Bamboo）Wall（中国）
2002年
万里の長城の近くに建つホテル。
写真は建物の中央にある、
水面に浮かぶように配置された茶室。

「Great（Bamboo）Wall」は20年以上前に設計した建物ですが、当時、日本の建築現場のレベルは非常に高かったのに対して、中国はまだまだでした。現場の人間に竹を持ってきてと言ったら、まっすぐな竹じゃなくて、全部曲がっている竹を持ってきて、「これしかない」みたいな感じで（笑）。それだから、曲がった竹を逆にうまく並べれば、まっすぐな竹よりおもしろくなるんじゃないかということを考えながらつくりました。日本でずっと仕事をしていたら、そういうやり方は学べなかったんじゃないかなあ。



スケッチには木炭を用いる。

――素材を大切にする隈さんにとって、契機となる作品だったんですね。

隈　建築物っていうのは、形よりも素材のほうが人間に対して、アピールできるんじゃないかと考えています。専門家の世界では形が重視されがちだけど、一般の人にとっては、建築って素材だと思うんです。その素材がしっくりくるかとか、自分をリラックスさせてくれるかとか。そういう一般の人の視点で建築をデザインしているので、素材は大切になってきます。

僕が目ざしてきた建築は、素材を大事にする、柔らかさを求める、周りと調和しているといった日本の伝統文化と通ずるものがあると思っています。そして今、そういった考えが世界から求められている気がするんです。日本人は宝をもっています。その誇りを日本人が取り戻すような建築を、海外にはその魅力をもっと発信していけるような建築をつくりたい。そういう意味では、日本文化を伝える大使みたいな役割を、これからもっと果たしていきたいなと思っています。

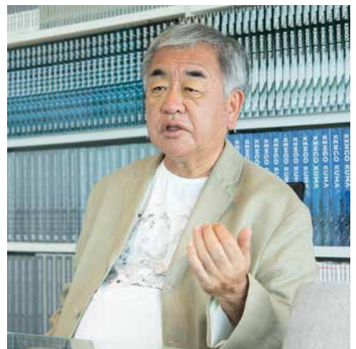


事務所は二つの建物に分かれており、一方の事務所のミーティングルームからは、
自身が設計した国立競技場を一望することができる。
「外苑の森に合うような、大きいけれど神社みたいなものをつくりたかったんです。」

――最後に美術を教える先生方にメッセージをお願いします。

隈　美術っていうのは、単に絵を描く技術の問題だけじゃない。作品を通じて、世界のいろいろな問題を考えることができるものです。そういった視点で、美術を教えてもらえたらいいなって思います。

あとは、子供たち一人一人と話せる機会があるといいんじゃないかな。僕自身、学生の頃に美術の先生に呼び出されて、「君は建築をやったらいいと思うよ」と言ってもらえたことにすごく励まされた。子供っていうのは、そういうちょっとした先生の言葉で大きく変わると思います。



くま・けんご
1954年神奈川県生まれ。東京大学大学院建築学専攻修了。1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。自然と技術と人間の新しい関係を切り開く建築を提案し続けている。第80回恩賜賞・日本芸術院賞、第51回毎日芸術賞、第61回芸術選奨文部科学大臣賞など多数受賞。著書に『点・線・面』『負ける建築』(岩波書店)、『日本の建築』『自然な建築』『小さな建築』(岩波新書)など。現在、東京大学特別教授・名誉教授。